

学会シンポジウム：多様な臨床検査学教育の取組を検証し将来を考える

2. 保健学科における学部教育の検証

上田 順子*[§] 尾野 緑* 篠原 紀幸*
松井 智浩* 柳原 正志* 末永 弘美*

[Key Words] 学部教育、教育の検証、保健学科、カリキュラム、資格試験合格率

はじめに

山口大学医学部保健学科は、短大より改組して12年目を迎えた。本学科では、平成18年度より一般入試前期日程の個別試験が英語のみとなり、学生の気質は大きく変化してきている。さらに、ゆとり教育・家庭学習環境の変化により、理数系分野での学力不足、日本語力の低下・日常の経験不足等が指摘されている。このような状況下、我々教員はあの手この手で工夫し、学生に向き合っている。

保健学科となって、臨床検査技師(病院)だけでなく、他の分野へも進出できる学生を目指し、教育目標高く、検査技師教育に取り組んできた本専攻の学部教育を検証した。

I. 調査項目

本専攻の教育実状を調べ考察した。調査項目は、1. 入試実施状況、2. 各種の資格試験合格率、3. 特色のある教育、4. 病院実習・卒業試験と病棟実習、5. 卒業研究、6. 国家試験対策とキャリアデザイン指導、7. 求人情報と就職率、8. 卒業時アンケートの8項目とした。

II. 教育の検証

1. 入試実施状況

本専攻の過去5年間入試倍率は、平均2.2倍、偏差値および難易度は平均レベルと報告されており(代々木ゼミナール提供データ)、大きな変動はみられなかった。

2. 各種の資格試験合格率

第1期生からの国家試験合格率はほぼ100%であるが、本専攻の看板ともなっている細胞検査士養成課程(細胞診コース)の資格認定試験合格率はこの3年間低調傾向にある(表1)。机上学習の成果を反映する1次試験に不合格となる学生があらわれてきたことが原因と考えられる。その反面、健康食品管理士、バイオ技術者等の資格認定試験に挑戦する学生が増えている。細胞診コースを進みながら、重ねてこれらの資格も取得する学生もみられる。資格認定試験を大学時の自己目標として気楽に挑戦しているためか、ここ3年間の合格率は上がってきている(表2)。

3. 特色のある教育

1) 教育目標とカリキュラム

本学科が掲げる5つの教育目標を目指して、承認校でありながら指定校同等の教育内容を実施し

*山口大学医学部保健学科検査技術科学専攻 [§]jueda@yamaguchi-u.ac.jp

表 1 山口大学における資格試験合格率

年 度	国家試験 合格率	CT 合格者数 (受験者数)	CT 合格率
H 16: 個別(数理英)	94.4	6(7)	85.7
H 17: 個別(数理英)	97.3	1(3)	33.3
H 18: 個別(英)	100.0	2(3)	66.7
H 19: 個別(英)	100.0	6(7)	85.7
H 20: 個別(英)	100.0	6(7)	85.7
H 21: 個別(英)	100.0	2(8)	25.0
H 22: 個別(英)	94.7	5(8)	62.5
H 23: 個別(英)	100.0	4(8)	50.0

表 2 各種資格認定試験の合格状況(過去3年間)

	種 類	受験者数	合格者数	山口大学 合格率(%)	全国平均 合格率(%)
21 年度	細胞検査士	8	2	25.0	32.3
	健康食品管理士	31	21	67.7	76.5
	バイオ技術者認定(上級)	31	17	54.8	47.0
	バイオ技術者認定(中級)	9	9	100.0	71.3
22 年度	細胞検査士	8	5	62.5	43.6
	健康食品管理士	30	21	70.0	84.4
	バイオ技術者認定(上級)	13	11	84.6	49.8
	バイオ技術者認定(中級)	33	32	97.0	71.2
23 年度	細胞検査士	8	4	50.0	16.2
	健康食品管理士	23	18	78.3	87.4
	バイオ技術者認定(上級)	22	21	95.5	50.8
	バイオ技術者認定(中級)	30	30	100.0	71.9

(平成 24 年度高校生対象説明会資料より抜粋・一部改変)

ている。教育目標に照らし合わせて、多くの授業科目が2年生と3年生を中心に組まれており、基礎を重視した科目から先端技術を取り入れた科目まで、幅広い内容のカリキュラムとなっている。

2) 特記すべき授業

a) 解剖学実習

山口大学は本学の他学部(山口市)と医学部・工学部のキャンパス(宇部市)が離れているため、1年次の教養課程は山口市で学び、2年次以降は宇部市で学ぶというデメリットがある。専任教員から離れた地の1年生の時間割は、教養科目の他、一部、専門科目を組み込んではいくが、かなり時間的に余裕のある時間割となっている。

このような状況下、医療人としての意識を早く

に芽生えさせるために、1年次より専門科目を導入している。中でも、力を入れている科目が解剖学講義と肉眼解剖実習で、医学科の多大な協力を得て行われている。学生にとっては医療に携わる者としての自覚が芽生える貴重な機会となっている。宇部市で実習を行うためバス往復の時間を要するが、今後も継続したい科目である。

b) 検査機器学実習

2年生となり宇部市へやってくると、隙間なく授業が生まれ、超過密スケジュールとなっている。ゆったりとした1年次から脱却する意識改革の2年次である。特に、2年生前期では基本を重視した密度の高い授業が盛り込まれている。毎日実施される実習は、学生が眠くなる午後に配置する等

に絞られてくる。学内認定試験の合格ライン70%に到達した学生(4年生)は、今年度は5名と少ないが、やる気満々で心強い学生達である。

1年から段階的に知識を積み重ねていくことで、幅広い中から「やる気」ある学生が残ると思われる。講義前の予習レポートは必須である。また、学生の自己学習用に細胞診のwebサイトを作成し、細胞診を学びたい学生がいつでも利用できるようになっている。今後、合格率を上げるには、学生に如何にしてハングリー精神をもたせるか、また、どのようにすれば学びに喜びを与えられるかが課題と考える。

4. 病院実習・卒業試験と病棟実習

病院実習(8週間)は4年生前期で行う。学生は全5科目の履修を希望するが、諸事情で選択制としている。国家試験や就職試験対策を兼ねて、病院実習の最終評価に卒業試験を組み込んでいる。卒業試験の不合格者は、病院実習評価が不可となり、翌年に再び病院実習を行い、卒業試験を受ける。4年生後期には病棟実習を実施する。わずか5日間であるが、病棟で患者と接し病棟業務を直に体験することで、患者の病態だけでなくチーム医療の実際を学ぶことができる。

5. 卒業研究

卒業研究は16週間設定されているが、実際にはそれ以上の時間が必要で、4年生の空いた時間の全てを充てる状況で実施される。その成果は、年末に行われる発表会と論文集に集約される。細胞診コース学生も同様に取り組み、特別な待遇はない。

卒業研究の一貫として、今年初めて、チェンマイ大学学生(5名)と本学学生(2名)の交換留学(2ヵ月間)を実施した。当事者学生のみならず、受け入れの学生にとっても教員にとっても大いなる刺激を得て、共に視野が広がる良い機会となった。

6. 国家試験対策とキャリアデザイン指導

国家試験対策は、学生を「やる気にさせる」ために、毎月の模擬試験、夏期集中学習、国家試験直前までの学習指導等々、「全教員の熱心な指導」に尽きる。

特に、クラス担任(教員4人)が中心となり、進学や採用試験へ向けた学生のキャリアデザイン指導が丁寧に行われる。また、自己学習がはかどらない学生へは、教員の手厚い個別指導がなされている。

7. 求人情報と就職率

昨年度の就職率は86%、進学率は14%であった。採用内定件数は11月が最多であった。国家試験の自己採点結果後に就職活動を開始して、採用を決定した学生もあった。

8. 卒業時アンケート

保健学科卒業時のアンケート(看護学生を含む)では、ほぼ毎年、満足度の高い評価を得ている。平成22年度の調査では、満足度78%(山口大学全体77%)であった。

III. ま と め

現在の臨床検査技師教育システムに問題が多いが、「基本なくして応用なし」をモットーに、学生の能力を開花できるよう各教員が工夫して臨んでいる。基本を重視した種々の経験を積み重ねる中で、学生たちは変化に対応できる能力を養うことができると考える。「おもしろい!」と感じることが「やる気」につながる。どのようにして「おもしろい!」と感じさせるかが教育の醍醐味といえる。本専攻では、各学年で段階的に意識改革を行い、教育目標へ到達できるよう取り組んでいる。「臨床検査技師国家試験に合格する」ことは、4年間の集大成となる。また、各種の認定資格の取得や国際交流活動等による達成感は今後の人生の自信につながると考える。本専攻では、社会人として信頼され、リーダーシップが取れる臨床検査技師あるいは研究者となる卒業生の輩出を目指して教育を行ってきた。今後も、学生に夢と希望を与えられるよう、また、医療現場や社会の要請に応えられるよう、教育を検証し改善していきたい。

謝辞 シンポジウム発表にあたりご協力頂いた同専攻野島順三先生を始め関係者の皆様に深謝いたします。